

～子どもの学習支援・居場所づくり～

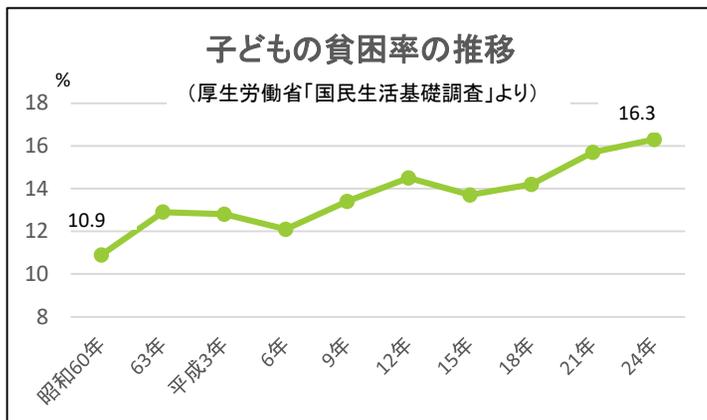
～はじめに～

生活困窮者自立支援制度の施行後1年半を経過し、各市町村では様々な施策や地域・団体等との連携により、子どもの貧困対策に関する取り組みが進められています。厚生労働省がまとめた調査では、「子どもの貧困率」が全国平均では6人に1人となっており、そのおかれている環境等によって低学力、いじめ、不登校等、日々「生きづらさ」を感じながら暮らしている子どもは少なくないと思われます。

鳥取県においては、平成27年度から平成31年度までの5年間を計画期間として「鳥取県子どもの貧困対策推進計画」が策定され、教育支援・生活支援・保護者の就労支援・経済的な支援等、様々な施策と連動しながら一体的に推進していく方向が示されています。

また、全国では低所得世帯の子どもを対象とした「学習支援」や、学習の機会・友達づくり・話せる相手などを必要とする子どもを地域ぐるみで支える「居場所づくり」の取り組みも進められ、県内でも行政、社会福祉法人、地域団体、個人等、様々な連携による支援活動が広がっています。

今回のニュースレターでは、鳥取県内において実施されている生活困窮者自立支援制度の任意事業である「学習支援」のみではなく、経済的な理由に限らず学校に行きづらくなっている子どもや一人ぼっちで毎日過ごしている子どもが、勉強したり交流したりすることができる「居場所づくり」の取り組みや、地域に学習塾がなく町外へ通うのは負担が大きいことから、子どもや保護者の声をもとに町が学習塾を開いた取り組みなどを紹介します。



～鳥取県子どもの貧困対策推進計画の概要～

【教育の支援】

- ・放課後や土曜日における教育活動の充実
- ・スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等による相談・支援体制の充実
- ・キャリア教育の充実
- ・生活保護を含む生活困窮世帯やひとり親家庭の子どもを対象とした学習支援の推進
- ・高校中退者への支援の充実
- ・不登校・高校中退者の実態把握
- ・人材確保も目的とした奨学金の充実 など

【生活の支援】

- ・子どもの居場所づくりの充実
- ・生活困窮者に対する包括的な相談支援
- ・ひとり親家庭等の子育て支援の充実 など

【保護者に対する就労支援】

- ・一般就労が困難な生活困窮者等に対する段階的な就労準備支援の推進
- ・ひとり親の職業能力向上のための訓練促進 など

【経済的支援】

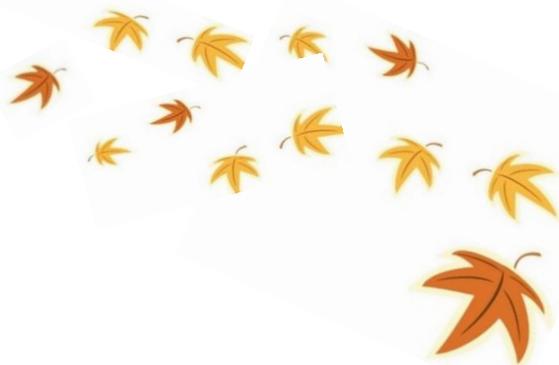
- ・保育料、小児医療費等の負担軽減
- ・経済的理由により就学が困難な生徒に対する授業料の減免、高等学校等就学支援金及び高校生等奨学給付金の支給
- ・生活保護世帯の子どもの高校等進学時の入学料、就学中の授業料等の支給 など

【調査研究】

- ・貧困の実態や各種支援の実態を把握するため、必要な調査を実施

《本号の内容》

- ・生活困窮者自立支援制度における個別の学習支援
～大山町社会福祉協議会の取り組み～
- ・学習支援と子ども食堂の展開による居場所づくり
～こども・らぼ（鳥取市）の取り組み～
- ・環境格差を解消！子育て支援の充実！
～県内初の公営塾 江府町の取り組み～
- ・お知らせ



社会福祉法人 大山町社会福祉協議会

大山町では、平成26年8月より生活保護世帯の子どもを対象に「子どもの学習支援事業」を開始し、平成27年4月からは生活困窮者自立支援事業の利用世帯も対象に加え支援を行っています。

大山町における学習支援のスタイルは、子ども1人に学習支援員1人の「個別支援」方式です。子ども一人ひとりの状況に応じたきめ細かな支援が特徴的です。



大山町の学習支援

対象者：生活保護受給世帯及び
生活困窮者自立支援事業利用世帯
(小学生～中学生)

開講日：子どもの状況に合わせ平日週1～2日実施

時間：子どもの状況に合わせ40分～90分

会場：大山町保健福祉センターなわ
他 関係施設（10月末現在3か所で実施）
※必要な世帯には送迎あり

大山町社協 福祉総務課長より

大山町で子どもの学習支援を実施するにあたり、「個別支援」のスタイルを取り入れた理由は、これまでの支援の中から見えてきたことが背景にあります。特にこの事業を周知するにあたって実施した家庭訪問では、それぞれの子ども達の環境や保護者の考え方の違い、たとえば学習机はもとより食卓も利用できず、階段に向かって宿題をする子ども、布団の上だけが自分の居場所だという子ども、学校や学習に対する保護者の意識にも大きな差があることなどの状況が見えてきたことから、少しでも子ども達の声が聞ける環境や一人ひとりの状況に応じた個別の支援が必要だと考えました。

このような一対一の学習支援を続けたことで、希望校に進学できた子どもや、学習支援員さんと良好な関係を築く中で表情が明るくなり、学習に意欲的に取り組む子ども達も増えてきました。また、不登校であった子ども達の中には学校に通えるようになった子どももでてきました。

事業開始当初、関係者の本事業への理解は低く、事業を軌道に乗せることが難しいように感じましたが、現在では学校、行政と情報共有を行い、各関係機関と連携した支援ができるようになりました。

今後も「個別支援」を主体に、社会性を育む楽しい行事等も取り入れながら息の長い事業として取り組んでいきたいと思えます。

学習支援員さんより

大山町の学習支援は子ども達を学習に向かわせるための体制が整っており、非常に良い学習環境であると思えます。私たち学習支援員は、子ども達のやる気をどのように向上させていくか、試行錯誤を重ねながら日々取り組んでいます。

学習支援に通う子ども達の多くは、世帯で様々な課題を抱える状況の中で育っています。経済的に不安定、養育環境が整っていない、家族の病気や障がい、ひきこもりや不登校などの環境下に置かれ、家族以外の他者と接触が少なく、社会性を育むことが難しいと思われる子ども達には、いろいろな人と関わりを持つ機会が必要です。学習支援はその第一歩であろうと思えます。自分と他者との関わりを少しずつ広げていき、「いろいろな人に支えてもらっている」ことを自覚することで、子ども自身にも課題意識が芽生えてきます。将来に向けてどんな目標を立てるか、どんな力を身につけたいかなど、自分自身で考え意識することが必要であり、その意識・意欲を子ども達の将来へとつなげるための支援をいかに行っていかかが私たち支援員の使命であると感じております。また、子ども達に対する親の意識や責任についての理解の有無が、子どもに学習支援が必要な大きな要因の一つとなっていることから、親への働きかけも併せて必要だと思えます。

学習支援に通い始めてからいろいろな人との関わりができ、外に出る機会が多くなったり、安心できる居場所ができたり、学力がついたり、子ども達のうれしい変化も見られるようになりました。多くの子ども達が笑顔で日々を過ごせるよう、社会や地域も子育ての担い手として関わっていくことが必要です。



鳥取市 学習支援団体 こども・らぼ

～子ども達の「学び」のお手伝い～

代表の岡さんにお話を伺いました

こども・らぼとは？

家庭の事情や学習習慣に課題を抱えていたり、学校へ気持ちが向かないなど、さまざまな背景を持つ子ども達に寄り添った支援をしたいという思いを持ったメンバーが集い鳥取市で活動している学習支援団体です。研究機関という意味のラボラトリー(laboratory)の略「らぼ」を用い、「子ども達の姿から学ぶ」という団体の基本理念にいつでも立ち返れるよう命名しました。ひらがなにしたのは誰でもわかりやすく、親しみやすいようにとの思いからです。子ども達と年齢の近い若いスタッフ達が一緒に勉強したり、ご飯を食べたり、いろいろな相談にのったり、子ども達の「学び」のお手伝いをしています。

活動を始められたきっかけは？

これまで多くの子ども達と接してきた中で、「SOSをだしている子ども」、「学校に行けない子ども」、「他者とコミュニケーションがとれない子ども」、「親の帰りが遅くご飯を作って待っている子ども」など社会的に孤立状態にある子ども達にたくさん出会いました。そのような子ども達と関わっていく中で自分に何か出来ることはないだろうかと考え「こども・らぼ」を立ち上げました。さまざまな事情を抱えた子ども達へ関わるにあたり、活動開始前に専門機関の協力を得て研修会や勉強会を実施しました。

子ども達の様子で気づかれたことはありますか？

通ってくる子ども達から「ここに来るのが楽しい♪」という声が聞こえたり「ここに来るものだ」と当たり前のように思ってくれている様子が見えたりすることが非常にうれしいです。ここが「子ども達の居場所」になっているんだと実感しています。子ども達同士の新たなつながりも生まれています。

他機関との連携はどうされていますか？

子ども達同士の何気ない会話や保護者等から何かサインが出れば相談機関に相談し、必要な支援へとつなげています。



こども・らぼのメンバー

印象に残るエピソードは？

家庭事情が深刻でコミュニケーションがとれず、ほとんど言葉を発しない子どもにも大学生の支援員が付きっきりで関わったところ、その大学生が休んだときにその子が「今日ぼくの先生は？」と言ったことです。これには驚かされました。この子は今では自分の意思を示し笑顔も見られるようになりました。

もう1つは子ども食堂でのこと。ある日子ども達に食べたいものを聞いたところ「ドリア」「メンチカツ」と声があがりました。何とかリクエストに応えようと頑張って作り、子ども達には大好評でした。材料費がかかりすぎるという課題もありますが、子ども達のあのうれしそうな笑顔が見られるのなら、またリクエストに応えようかなと思っています。

課題や今後の展望についてお聞かせください

子どもの居場所は誰もが「歩いていける距離」に必要なと思いますし、このような「居場所」を必要としている子ども達はまだまだたくさんいると思います。理想は各中学校区に1つずつあることです。このような活動に地域の人々が積極的に関わり地域の中でつくりあげていけるよう、また他の団体が立ち上がってくれるよう、情報発信にも力を入れたいと思います。

「こども・らぼ」の立ち上げ時から通っている子ども達は全員希望校に進むことができ、高校生になった現在は勉強を教えたり一緒にご飯を作って食べたりなど、支援者として継続的に参加しています。取材の日も小中高生達の笑顔が絶えず、みんなで楽しそうに会話しながら食事をしている光景がとても印象的でした。



江府町 江府いもこ塾

県内初!!
公営学習塾

町民の要望
から実現

受験を意識した
学力をつける

江府町は平成28年4月より、高校受験を控えた町内在住の中学3年生を対象に公営の学習塾である「江府いもこ塾」を開講しました。JR江尾駅2階の商工観光センター会議室を教室として使用し、毎週2回実施しています。塾の運営はNPO法人へ委託し、講師は町外の学習塾から派遣されています。

きっかけは、「江府町まち・ひと・しごと創生総合戦略」策定においてあがってきた「町内に学習塾がなく、町外の学習塾へ通うための保護者の送迎負担が大きい」との声でした。町は保護者へのアンケートを重ね、「地域的なハンディキャップ」の解消と「次世代を担う人材育成」を目指し優先的に取り組みました。

現在、中学3年生の8割が通っており、講師も感心するほど熱心に学習に取り組んでいます。数学の授業では個々の学習の進捗状況に対応するために大学生も学習支援を行っています。あらゆる面で子ども達の学習をサポートする体制は保護者にも好評で、開催回数の増加と対象学年の拡大を要望する声もあがっています。

担当課長は、財政的なこともあり要望に全て応えることは難しいが、実際の利用状況や意見を反映しながら学習環境のさらなる充実に向けた取り組みを検討していきたいと話しており、今後も行政が取り組む積極的な人材育成策の発展が期待されています。

江府いもこ塾概要

対象者: 江府町在住の中学3年生
科目: 数学・英語
開講日: 毎週火曜日・金曜日
時間: 19:00~20:30
場所: 江府町商工観光センター
(JR江尾駅2階)
受講料: 月額2,000円(一律)



「江府いもこ塾」名前の由来

芋を桶の中でかき混ぜることを「芋をこじる」と言い、芋と芋が互いにこすれぶつかり合うことで磨かれた芋になります。江戸時代に二宮尊徳は若者が集まり互いに学び合い、磨き合う様子を「いもこじ」と呼び、その学び方を広く進めていたといわれています。そのことから江府町の宝である子ども達が意欲を持って互いに学び、磨き合い、成長してくれることを願って「江府いもこ塾」と命名されました。

▶ 事例検討会を実施

9月5日(月)に淑徳大学総合福祉学部 准教授 山下興一郎先生を講師にお招きし、今年度第1回目の事例検討会を実施しました。今回は「家計管理に課題を抱えるケース」をテーマに2つの事例について検討を深めました。

当日は34名が参加し発表者の事例を追体験しながら課題や疑問点を整理し、グループワークでは参加者相互の活発な意見交換が行われました。事例のポイントとなる箇所ではその都度、山下先生の的確で分かりやすい助言があり、参加者のみなさんから大変有意義な研修であったとの感想をいただきました。

第2回事例検討会は12月12日(月)に開催予定です。

みなさまのご参加をお待ちしております。



～県内研修の御案内～

- ・家計支援研修 11月中旬頃 講師: 国研修受講修了者
- ・第2回事例検討会 12月12日(月) 講師: 淑徳大学総合福祉学部 准教授 山下興一郎氏